

読む力・書く力を伸ばすアクティブラーニング

安永 悟

初年次教育学会 会長・久留米大学文学部 教授

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました安永でございます。お手元にスライドの主だったものがありますので、それを参考にさせていただきながらお話をさせていただきたいと思います。

今日の講演のテーマは、「読む力・書く力を伸ばすアクティブラーニング」です。関田先生の方からこういう内容で話していただけないかということでした。このようなテーマをいただいて、何を話そうかと相談しました。そうしますと、実は初年次教育について少し再確認をしてもらいたいのだということでした。目的・内容・方法・成果、それともうひとつは初年次教育というものが単独であるわけではなく、接続教育の中にあるはずだから、そのあたりのつながりをもう一度検討し、確認したいので、このようなテーマにしたのだということでした。そうでしたら、読む力・書く力というものを活かさないといけませんし、アクティブラーニングも活かさないといけませんので、今日はそのようなこととお話した上で、接続教育に繋がっていきたいと思っています。

「読む力・書く力を伸ばすLTD」ですが、このLTDを基盤とした授業づくりは2002年、2003年からやってきました。2010年頃からアクティブラーニングという言葉が、周りの先生

方の間で使われるようになったのですが、何だ、これまで自分がやってきたのはアクティブラーニングだったのかという感じになりました。今日の講演では、このLTD基盤型アクティブラーニング授業をやっている「教養演習」をご紹介したいと思います。

創価大学では、「基礎演習」という科目名で全学部にわたってやっているのでしょうか。今、先生方のご報告を聞きしながら、本当に素晴らしいと思いました。このような大学とお付き合いをさせていただくことは、たいへん名誉なことだと思います。何が素晴らしいかというと、全体的なビジョンがきちんとしているということと、そのビジョンだけではなく、それに向けてのロードマップ、計画性が素晴らしいということですね。それからもう1つは、実際にやっているということです。もちろん、レベルは高い方がよいのですが、やはり学部によって差が出てくるものです。そこを創価大学はうまくやっておられるようです。まず経営学部から出発し、文学部、看護学部というようにやっておられるわけですね。そのあたりに計画性があり、全体としての取り組みもあるわけですね。大学全体として取り組んでいるときに一番重要なことは同僚性ですが、このように熱い仲間の先生方がこんなにたくさんいる大学は、他にないの

ではないでしょうか。これは大学の財産だと思います。

初年次教育の目的

最初に、初年次教育の目的ですが、次のようにいうことができると思います。スライドにも出ていますが、「大学での学びを支える基本的な態度とスキルの獲得を通して、新入生の大学教育へのスムーズな適応を促し、専門教育を含む大学教育全体の質向上に貢献する」ということですね。中身を箇条書きにまとめると、大きく2つに分けることができると思います。1つは大学教育に対する適応、つまり高大接続です。いま1つは、専門教育への接続ですね。

前者の中身は、基本的な生活習慣を身に付けるということです。これは、協調性のある主体的で能動的な学習者を育成する、と言い換えることができると思います。初年次教育に長い間、関わってきましたが、学習スキルを身に付けることも重要ですが、それ以上に基本的な生活習慣を身に付けることの方が、恐ろしいほど重要な意味をもっていると感じます。基本的な生活習慣が身に付かないと、学習スキルも身に付かないわけですね。学習スキルというのは、3つに分けられます。論理的思考（科学者の思考パターン）、言語技術（見る・聴く・読む・話す・書く）、情報処理（収集・整理・分析）ですね。それから専門教育への接続という点では、教育目的の意識化と見通しを共有するということですね。

初年次教育の方法

私たちの久留米大学では2004年から、当時は「基礎演習」という科目名でやっていましたが、その後、「教養演習」という科目名に変えました。私の所属は心理学科ですが、心理学科の方でもいろいろとやってきました。多くの場合、「教養演習」とか「基礎演習」というのは、1人の先生が10名前後の学生をもって指導するということが多いのではないかと思います。

それもととてもよいと思うのですが、先生の間で温度差が出てきたりしまして、なかなかうまくいかなかったことがありまして、その後、2009年からいろいろと話し合いをしまして、前期だけは私が全部担当することになりました。

今日、皆さんにお話しするのは、私が担当している2015年度前期の「教養演習Ⅰ」です。94名の学生に対して、教員は私1人です。それにTAが2名付くという形で授業をやっています。実は2009年度からですが、担当教員を3名にしています。別の教員2名は、FDにしています。新しい先生が来た場合、私の授業に入って参観するとか、時々、演習に参加してもらったりしています。

「教養演習Ⅰ」の重要なポイントは、94名の学生をいかにコントロールするかということですが、そのベースにLTDを入れているということですね。授業目標は4点を掲げています。①主体的かつ能動的な学習を実践できる、②論理的な言語技術を活用できる、③基本的な生活習慣を実行できる、④大学4年間の見通しをもてる、という4点です。

「教養演習Ⅰ」の基本構造

この2～3年間、「教養演習Ⅰ」の授業で気をつけてやっていることが、②の論理的な言語技術の育成です。レポートが書けるようになることは、初年次教育の当初からの大きな目的でした。レポートを書けるまでにどのようなことが必要なのかということをきちんと教えたいので、レポートが書けるようにならないといけないし、レポートが書けるようになったら、それをいかに大学教育で使うのかというところまで指導しないとイケないわけですね。単にレポートが書けました、1200字を書けました、間違い・誤字脱字ありません、それで終わりではないと思うのです。もう少し深いところがあるわけですね。論理性です。この論理性を対話によって育成できないだろうかと考えています。そのとき、どのように授業を組み立てていくか

というと、まず協同学習のスキルを教え、その次にLTDをやろうと考えているわけです。

当初はこれが逆だったわけですね。LTDさえやっていればよいという発想があったのです。ですから、LTDを教えたものの、なかなかうまくいかないわけです。なぜうまくいかないのかなと考え、話し合いのスキルを持っていなかったわけです。そうだったら、LTDを入れる前にもう少し丁寧に「協同学習のスキル」を教えようということになりました。しかし、スキルを教えるだけでもやはりうまくいかないことがあります。最近、こだわっていることは「協同の精神」を入れていくということです。そういう中で、この言語技術の育成ということを中心に意識した授業づくりをしています。もちろん、それ以外の基本的な生活習慣も頭の中に入っているのですが、今日の講演では、スライドにあるように「協同学習のスキル」を身に付けてから、「LTD話し合い学習法」をやるというように書いておきました。

「教養演習Ⅰ」の授業計画

「教養演習Ⅰ」は週1回15コマの授業ですが、次のような流れにしています。

- 1-2講 協同学習の理論と技法
- 3-5講 授業の受け方、ノート、見通し
- 6-8講 LTD話し合い学習法
- 9-11講 言語技術、論理的な文章構成
- 12-14講 言語技術、レポート作成方法
- 15講 振り返り、まとめ

最初は、協同学習の理論と技法です。次に授業の受け方、ノートのとり方、学生生活4年間にどのような見通しをもつのか、ということです。ただ、ここで1つのアイデア、工夫があります。他の授業が、例えば4月10日から始まるのであれば、それよりも前に、今年の場合は4コマを集中的にやっています。2コマと2コマです。なぜかというと、他の科目で様々な授業を受けたあとで、4コマの授業をやってもなかなか効果がありません。一定の構えを作ったう

えで、他の授業を受けて、体験してもらうというわけです。様々な先生がいらっしゃいますので、それに対する免疫をつけるという狙いがあるって、そのようなことをやっています。

学生の立場からすると、前期の授業が始まる前になぜそのような指導をされないといけないのかと思っているかもしれませんが、実際に全体の授業が始まってみると、ああそうだったのかと分かってくれます。その後、LTD、言語技術をやりまして、レポートの作成方法、そして振り返りという流れになります。

活動性を高める授業づくり

私の場合、1回1回の授業を出来るだけアクティブにしよう、活動性の高い授業づくりをしようということをやっています。一コマ一コマの授業を自由な発想と創意工夫で構造化をしていくということです。そのときに協同学習の理論と方法をベースにしながら、授業づくりをしています。先ほども言いましたが、最近はこの「協同の精神」という言葉を定着させたいと思っています。「協同学習」はいいと思うのですが、「アクティブラーニング」というのは、カタカナ語がいっぱい入っていますね。今日、こちらの大学に来るときに、再度考え直したのですが、「協同」も外国の言葉みたいな気がしまして、「和の精神」くらいでいいのではないかと考えています。とにかく馴染みやすいものにしたいなと思っています。

今はこの問題にこだわっています。先週、研究会をやったときに、この話を皆さんにご披露しました。「最近、協同精神というものを考えて、今のところそのように定義しているのだけれど、どうでしょうか。これはあくまで仮の定義だから、皆さんで一生懸命に鍛えていただいて、そのようなものが真ん中にあればいいですね。そういうものを一緒に作っていただけませんか」ということを話しているところで

学びを支える「協同の精神」

学びを支えるのが「協同の精神」です。「よりよき社会と人生を求め、仲間と心と力を合わせて、今なすべきことを自分から見つけ、真剣に取り組むという生きる姿」ですね。今なすべきことに真剣に取り組むということです。「切磋琢磨」という言葉が中教審の中にも出てくるようになりましたが、まさに「切磋琢磨」です。今、何をやるべきなのかを考え、それを必死にやるということです。先生もアクティブラーニングの素晴らしさを理解し、それを学生にきちんと伝えないといけないと思っています。ですから、このあたりのことを学生に熱く語る、同時にどうやったらいいのかを伝えていく、そのようなことが最初にやっている私の仕事かなと思っています。

この「生きる姿」は、1人1人のレベルでも見ることができます。それからクラス全体のレベルでも見ることができます。それから大学全体のレベルでも見ることができます。ですから、いろいろなレベルでこの姿を見ることができるわけです。そのような意味で創価大学の姿はすごいと先ほどお話しましたが、学びの世界にあてはめると、以前から使っている「学習目標の達成に向けて仲間と心と力を合わせて真剣に学ぶ姿」が出てくるわけです。学生たちが本当にいいねという感覚になって、その上で「教え合い、学び合い、励まし合い」をやっていくと、「基本的な信頼関係や支持的・協同的な風土」ができるようになります。これがクルクル回っていくと、面白い世界が展開されると考えています。このようなことを考えながら、授業づくりをしているわけです。

技法の体系的・重層的活用

次に「教養演習Ⅰ」の授業で、どのような技法をどのように使っているのかについて簡単にお話します。

技法の体系的・重層的活用

1-2講	協同学習の理論と技法	傾聴・ミラーリング TPS・RR		
3-5講	授業の受け方、ノート		特派員	↓
6-8講	言語技術（聴く・話す・読む）		↓	↓
9-11講	LTD話し合い学習法	LTD	ジグソー	↓
12-14講	言語技術（書く）	↓	↓	↓
15講	ふり返り、まとめ	↓	↓	↓

「傾聴」「ミラーリング」

最初にやっているのは、「傾聴」「ミラーリング」、それから「シンク・ペア・シェア(TPS)」「ラウンドロビン(RR)」です。最初に、話し合いにとって基本的なスキルを教えます。今日は詳しくお話しできませんが、「傾聴」というのはご存知のように、必死になって聞く、体を必ず相手に向けて聞く、うなずいてあげる、目を離さないというようなことです。意外と難しいですね。小学生にはおへそを向けなさいと言います。それを学生にも分からせるわけです。

「ミラーリング」というのは、もし理解できないことがあれば、あるいは自分が発言するときには前に話した人の発言を引き取って、次のように復唱してやることです。「こんなことを仰いましたね」「面白かったですよ」「私もこう考えますけど」というようなことです。これをやるのが「ミラーリング」です。この「傾聴」「ミラーリング」をきちんとできると、本当に信頼関係ができてきます。

「シンク・ペア・シェア」「ラウンドロビン」

「シンク・ペア・シェア」は、例えば、クラス全体にこんなことやってくださいと課題を与えます。1人で20秒間考えてください、何でもいいますから振り返ってくださいとやります。その後で、ペアで1人がまず30～40秒喋ってください、その後にこちらの人が喋ってくださいという指示を出します。それから何か質問がありませんか？とやれば、これが「シンク・ペ

ア・シェア」という流れになります。これを3人以上でやると、「ラウンドロビン」になります。

このようなことを最初に自己紹介を通して教えていきます。しかし、慣れてきたら、やはり手抜きが始まります。それは許してはいけません。傾聴ができていないよとか、最後までいつまでもきちんとやろうねと注意しています。

「傾聴」「ミラーリング」「シンク・ペア・シェア」「ラウンドロビン」をやるのは2コマ目ぐらいまでですが、これはすぐにできます。これをやると学生たちは喜んで乗ってきます。初めての経験ですし、初めての人と話せるということもあってずいぶん乗ってきます。しかし、3コマ、4コマ、5コマ目ぐらいになると、少し手抜きが始まります。飽きてくるわけです。そうすると目先を変えて、もう少し複雑なグループ活動を取り入れて、ペアだけではなく、グループだけではなく、グループを超えて94名いますから、いろいろな学生と交流させるために「特派員」という技法とか、ジグソー学習法を取り入れていきます。

「特派員」、ジグソー学習法

「特派員」というのは、学生たちをいくつかのグループに分け、最初に検討課題を示して意見集約をやります。その次に、グループ内の学生を「特派員」と「報道員」に役割分担します。「報道員」は隣のグループ、あるいは2つ隣のグループから来た特派員に、それぞれのグループの意見を説明するわけです。「特派員」は逆に隣のグループ、2つ隣のグループに行って、相手のグループの意見を取材します。そのようなことをやることで、意見を交流させるわけです。私の場合、4人グループでやりますから、4人グループで話し合った内容をいくつかのグループの間で交流するということですね。

ジグソー学習法は有名ですね。例えば、4人グループに課題を与えます。しかし、1人で全部を勉強するのは大変ですから、4分割をして

1人1人が分担をします。その分担した中身を徹底的に1人で勉強します。それで教え合いをすればよいのですが、なかなか自信が持てません。幸い、同じことを勉強している他のメンバーがいますので、そのメンバーと一緒に勉強して専門家になったうえで、元のグループに戻ってきて教え合いをするというのがジグソー学習法です。コンテンツ、中身の方はそれぞれの教材がありますので、ここでは技術的なことだけをお話しておきます。

LTD話し合い学習法

ここまでやりますと、ずいぶんと学生たちは話し合いが上手になりますので、ここでLTDを入れていきます。以前はLTDを私自身が説明していましたが、今はジグソー学習法を使って学生自身で勉強させています。ですから、私自身が説明することはほとんどありません。「Learning Through Discussion」はこのようなステップがあって、まず自分で予習してきなさい、そして、自分で作った予習ノートを手がかりにして話し合いを60分間しなさいということです。

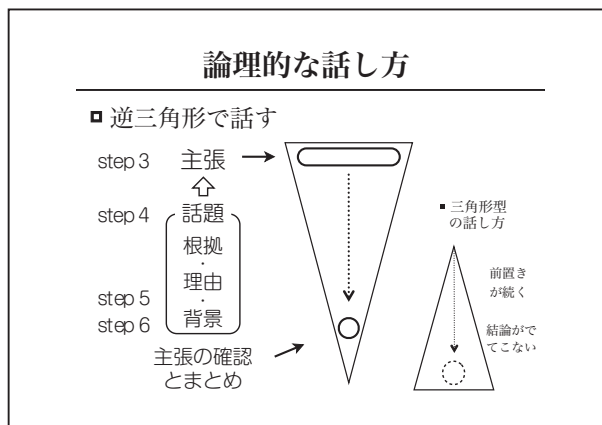
このような形で技法を体系的に使うのがいいのではないかと思います。今のようなやり方をしている、仲間と真剣に対話させる。これは先ほどもお話した「真剣に学び合う」ということなのですが、最近、少し研究が進んでいるところがあります。学生たちに「協同の精神というのはいいですね」と聞くと、皆が「いいですね」と言います。「私、大好きです」という学生もかなりいます。しかし、その中身をみると若干違うのですね。現在、私の大学では大学院生が「優しい協同」と「厳しい協同」に分けています。「優しい協同」と「厳しい協同」、何となく分かりますね。いいネーミングですね。これは北海道の酪農学園大学の大和田秀一先生と2人で話していたら、提案してくれたからそれで使っています。

「厳しい協同」というのは、本当に切磋琢磨

して伸びるためにぶつかり合って、話し合いをしている感じです。それに対して「優しい協同」というのは、「そうだよね、私もそう思う、うんうん、そうよかったね」とか言って、それで終わりです。この違いを分かっただけですよね。真剣に学び合いますと、相手のことを理解しようとする思いやりの原理といったものが出てくるわけですね。実はこれが論理性を高めるのだという研究がありまして、私もそうだと思います。

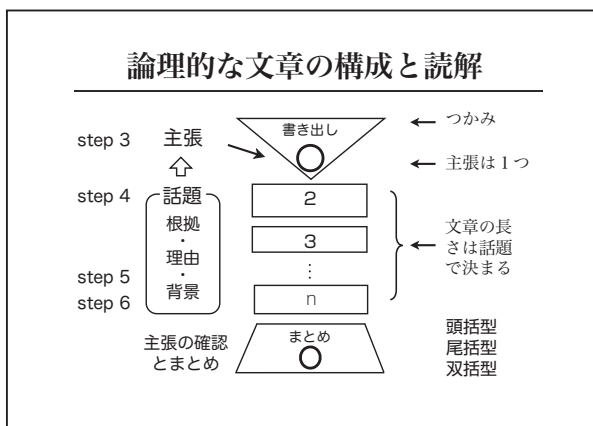
論理的な言語技術の育成

論理的な言語技術というものは、実はベースは一緒だろうと思っています。私の場合、LTDをベースにしたいわけですね。「話すときには必ず結論から言いなさい、主張から言いなさい」と教えています。「逆三角形で話すのですよ」と言っています。で、これはLTDをやる前から説明しているのですが、LTDをやったあとは、次のような形で関連づけをしています。「ステップ3は主張だったでしょ、ステップ4は話題だったでしょ、ステップ5、6は根拠、理由、背景のことだよ。話すときもLTDのやり方でいいのだよ」と話しているわけですね。



これはレポートの書き方、アカデミックライティングでも同じです。1200字ぐらいのレポートを書く場合、冒頭に「つかみ」を書くこともあるけれど、「パラグラフの最後には自分の主張を述べるのだよ。忘れちゃだめだよ」と言っています。冒頭に「つかみ」を書くことができ

ない場合は、「主張を述べなさい、そのあとに話題を述べなさい、根拠を述べなさい、最後にもう1度まとめればいいのだよ」と話しています。



1つの段落を書くときも同じです。「1つの段落、パラグラフを作る場合も、同じことが当てはまるのだよ」と話しています。「ステップ3、ステップ4があるのだよ。何でもLTDのステップで考えればいいのだよ」というわけです。ですからLTDを真ん中において、LTDのステップがいつも頭の中に流れるような状況までもっていくというのが、私のやっている作業なのです。



協同学習の効果

これまでの私は今、お話してきたようなことをやってきたわけですが、協同学習の効果という点でいいますと、論理的な思考力は向上していると思いますし、いいレポートも書けるようになったとも思います。仲間と一緒に一生懸命

に勉強すると伸びていきます。「勉強が好きだ、仲間が好きだ、この学校が好きだ」ということになるのですね。実際にそのようにしてスキルを教えています。1つの授業の中でこれだけのことを伝えることができるということですね。

ここで私の大学でやっている簡単な調査をご紹介します。最初に、事前調査をやります。その時々テーマに合わせて色々な種類をやっています。その調査ですが、最後の授業でやるというのではなく、13コマ目あたりにやります。それから2週間かけて必死になって入力し、チェックし、結論を出して、最後の授業で学生たちと一緒に見て、振り返りをやっています。ディスカッションスキルの伸び具合ですが、4月と6月の2ヶ月間にどれだけ伸びたかということです。協同学習に対する信頼が高まっています。個人でやった方がいいよという学生が減っています。協同学習というのは、学力の低い学生のためにあるのでしょうかというような見方も下がっています。

批判的思考態度を見るデータもあります。これは他にはないデータだと思います。徹底的に話し合うことによって、どれだけ思考力が伸びたかを見るデータです。これは京都大学の楠見孝先生が開発されたものを使っているのですが、これもきちんと伸ばすことができますね。去年はあまり効果が現れなかったのですが、今年はよい傾向が出てきました。これまで授業中にあまり言及しなかったのですが、これからもっと言及するような授業に変えていくことで、さらに伸びると思います。

対人関係に関する適応度は、有意に伸びています。ところが、学業に関する適応度は、下がっていますね。去年はもっと下がっていたのですが、今年は踏みとどまりつつあります。理由は簡単ですね。4月の段階で調査しますと、学生たちは大学に入学して今から勉強するぞとすごく燃えているわけです。緊張してはいますが、何でもできるという万能感に近いものをもっていますね。ところが入学して2ヶ月もす

ると、新しい勉強の仕方を考えないといけないわけです。従来は先生が黒板に書いて、ノートを取って覚えることが勉強だと思っていたものですから、新しい勉強の仕方を知ってびっくりするわけですね。なかなか上手くいかないで、下がってくるみたいです。これはどうしようもない通過点だと思います。しかし、これが今年は下がらなかったのです。毎年、学生が変わっているということを強く感じます。

将来に対して見通しをもつことができた、あるいは計画を立てて自分でやれるようになったというホープ尺度があるのですが、これも伸びています。このように言いますと、今年はたまたま伸びただけでしょうという批判もあると思います。実はこの調査は2年目なのですが、やはり同じ結果が出ています。

このような結果を出しているのは、私だけではありません。私と一緒に授業を開発している須藤先生が別の看護学校で同様の授業をやっています。同じ結果になりました。それから、須藤先生が担当しているクラスでは最後にエッセイを書かせています。1200字程度のエッセイを書かせているのですね。これも話し合いによって書いていくのですが、このエッセイが2013年に全国コンテストに2編合格しました。60編ほど応募があったなかで8編が入選しました。その後、3年間チャレンジしているのですが、トータルで5本入選しました。2本、1本、2本と入選しています。こういう風なことをやっていると全く書けない学生たちが、半年間やると書けるようになってきます。また、私が別に教えている看護学校でも、学力が伸びています。全国模試のテストの成績が、以前は250校中の200番ぐらいだったのですが、現在は県内1位、全国2位までになってきました。臨地実習ですが、非常に高い評価を受けています。この点については参考文献などが出ていますので、ご覧になってください。

（註）須藤文・安永悟(2014)「LTD話し合い学習法を活用した授業づくり：看護学生を対象

とした言語技術教育」『初年次教育学会誌』6-1、pp.78-85。

アクティブラーニング型授業の体系化

現在、1年生前期の段階でここまでのことをやっているわけですが、私はこれを「基礎モデル」（基礎的な授業モデル）と考えています。その上にはTBL（チーム・ベースド・ラーニング）やPBL（プロブレム・ベースド・ラーニング）など様々な学習方法があります。これらの学習方法は「発展モデル」と考えることができます。ですから、「基礎モデル」から「発展モデル」に展開していく必要がある、そのようなことがあってもよいのではないかと考えています。

学内におけるアクティブラーニングだけではなく、学外におけるアクティブラーニングに繋げていくというのも同じですね。アクティブラーニングをやっていると、学生を学外に安心して連れ出して、活動させることができるわけです。アクティブラーニングをやっていなかったら、学生を学外に出そうという気持ちになれませんね。いつ、どのような事件、事故を起こすかと心配になってしまいます。しかし、ここまでやっていれば、私の方も「やるべきことはやったのだから、行っておいで」と言うことができます。あとは私が責任を取るからという感じで、出すことができるわけですね。実際、学生は応えてくれます。本当に応えてくれます。3年生の段階になりますと、心理インターンシップで学生を学外に出していますが、本当に面白い世界が展開しています。その先に現場があるということですね。

接続教育の観点からみたアクティブラーニング

次に接続教育の観点から、アクティブラーニングを考えていきたいと思います。私の持論ですが、大学の基礎演習でやっているようなことは、高校でやっていただきたいと思っています。そして、大学に入学した段階でどの程度できる

のかという確認を1週間程度でやって、「よし、このレベルまで到達している」ということであれば、1年生前期の段階から、次の段階へ入っていくことができるわけです。そうすることで、初年次教育の質が全く変わっていきます。実はこれが夢ではなくなりつつあります。

現在、小中高では積極的にアクティブラーニングを取り入れています。それでは何を取り入れていけばよいのかということになるのですが、現在、高校が非常に模索しています。ですから、そのように模索している高校に1つのアイデアを提供してあげればいいわけですよ。先生方は非常に熱心で、優秀な先生方がいっぱいいますから、あっという間に吸収してもらっています。

今、高校生たちが育ちつつあります。私が最初に付き合った小学生が現在、大学入試を受験する年齢になっています。小中高で経験値を積んだ高校生たちが大学に入学してきますので、今まではゼロの世界から半期をかけてやっていたものが、もっと短縮できるのではないかと期待しています。その学生の前向きな姿勢に合わせて、大学の初年次教育もどんどん変わっていくのではないかと期待しています。

私がやっているLTD基盤型アクティブラーニング授業ですが、こういう横文字が並んだ名前は絶対によくないと思いますね。協同の精神を「和の心」と読み変えるように、アクティブラーニングという横文字を、日本語のよい言葉に変えたいですね。日本人の心にストーンと入っていくような言葉にしていきたいと思っています。

初年次教育の目的ですが、このレベルまでできて欲しいというものはあります。私は初年次教育をやっていますが、専門教育もやっています。何を考えてやっているのかと言いますと、少し気恥ずかしいのですが、全ての人が平和で幸せに暮らせる社会づくりに貢献できる人材を育成したいと思っています。そのために1年生の段階で私たちにできることは何なのかを考えているわけです。決して1200字のレポートを書く

ことができればいいということではないのです。
この点ご理解ください。

ですから、内容が変われば方法も変わります。子どもが変わって、先生も変わるわけですから、当然、方法も変わるはずですね。しかし。成果だけは高いレベルで維持したいですね。ですから、学生が変われば変わるほど、色々取り込んだ上で接続教育という意味では、先ほども言いましたように小学校から大学まで、とくに高校教育との役割分担をどうするのか、そして、専門教育への繋ぎをどうやっていくのかということを考えていきたいですね。多くの先生方が専門科目を担当されながら、初年次教育の基礎演習にも参画されているわけですから、非常に繋ぎやすいと思っています。さらに言えば、専門教育の質・レベルを上げるためには、この初年次教育をどう使えばよいのかという視点でやっていくことができれば、面白くなるのではないかと考えています。

ちょっと早口でお話してしまいましたが、ほぼ時間になりましたので、これで終わりたいと思います。どうも、ご清聴ありがとうございました。

